「NowHere - 永遠の瞬間で均衡をとること」（キッティ・ザイルマンス）
（展覧会カタログより作品該当箇所抜粋）

一階の階段口の横に隠れている狭い廊下を通り抜けると、小杉＋安藤のインスタレーションが設置してある薄暗い部屋があります。部屋の中心には金属製の椅子が置いてあり、そこから四方の壁に向かって鎖が伸びています。部屋の隅にはビデオモニターが、椅子の斜め後ろにはインタラクテイプ・コンピューターがあります。コンピューター画面に直接触れて、画面上の文字や言葉を操作することができます。この作品の意味は、薄暗い部屋を歩き回ってみるだけでは理解できません。単一的な心臓の鼓動が聞こえます。その椅子に座ってみてください。冷たい、金属の椅子に。椅子に座ると仕掛けが動くようになっています。目の前の壁に映写機から日本の児童たちの学級写真が映し出されます。先生に引率された子供たちの小さな真剣な顔が一枚一枚ゆっくりと映し出されていきます。これは、過去への旅なのです。一歩一歩、十九世紀末に向かって戻ってゆきます。モニターの役目にはっと気が付かれるでしょう。モニターに表示されているのは、映写されている学級写真がそれぞれ撮影された年です。撮影年は次の写真に替わるまで静止していますが、モニターには同時にタイマーが速いテンポで、1/ 100 秒を刻んで行きます。映し出される写真を一通り見れば、時間や風俗の移り変わりに気づきます。服装や髪形の変化です。ほんの何十年か前まで児童は制服を着て、男子の頭は丸坊主です。それ以前は、児童も先生も和服を着ています。全く別の国のようです。
さて突然、写真に変化が現れます。最後の写真で、まじめな顔の児童たちがほほ笑み始めます。別に写された児童のクローズアップを見れば、写真に手が加えられているのだということが分かります。児童の口角を上げ笑顔に見えるように修正しているのです。しかし修正してあるのは口元だけで目は元のままですから、目と口元の表情が不釣り合いなおかしな写真です。作者は、この笑顔から何を訴えようとしているのでしょうか。同級生と一緒に毎年ポーズをとった学級写真のこと、どんな学校だったかなど、ご自身の学校生活が思い浮かんでくるでしょう。今ここに居るということがおぼろげになり、時間の振り子にのって、ご自身の過去へと誘われて行きます。見ず知らずの児童の写真を目の前にして、自分自身がどんな児童だったかが問われるのです。「僕（私）」対同級生たち。この作品は Pendulum （振り子）と名付けられており、現在と過去、つまり自己が形成された時間を行き来する振り子を表現しています。